



『太平記』 卷十の構造について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-12-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石井, 由紀夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00010669

『太平記』 卷十の構造について

石 井 由 紀 夫

一

『太平記』という作品は、中世の軍記物語の主要な作品の一つであり、その成立は、十四世紀と考えて間違いないものと思われる。『太平記』は、四十巻にもなる大部な作品であり、後醍醐天皇の倒幕運動から始まり、その結果としての鎌倉幕府滅亡するまでの部分（巻一から十一まで）を第一部として分類することが一般的な考え方である。その中でも、楠木合戦譚とも言える赤坂・千早城の攻防戦を除けば、巻十の「鎌倉合戦」の章段群は魅力あるものと言えよう。

巻十の構造を一言で言えば、新田義貞の挙兵から北条高時の自害による鎌倉幕府の滅亡ということになる。しかし、その描き方は、『平家物語』の合戦譚とはひと味違った描写になっている。それについて、この論考では『太平記』（以下、特に断らない場合、『太平記』の引用は新潮日本古典集成によるものとする。流布本）の記述に沿って考えていきたい。

巻七の「新田義貞に綸旨を賜ふ事」の章段で大塔宮護良親王

から綸旨を賜った新田義貞は、病と称して本国へ帰還する。その後、赤松円心や四国の河野の蜂起によって、六波羅側の敗勢は日々強まっていく。そんな中鎌倉では再度大軍を上洛させることになり、その軍資金として「臨時の天役」という税を課せられることになった。その鎌倉からの使者二人を生け捕りにし、一人を斬首したことから鎌倉幕府に叛旗を翻すこととなった。

僅か百五十騎ほどの勢で、謀叛を始めた^(*)『太平記』は「新田義貞謀叛の事」の章段（巻十一・II）で記すが、間もなく越後の新田一族の軍勢先陣二千騎が到着する。その後、後統の五千騎も到着して軍として形が整ったので、元弘三（一三三三）年五月九日に上野から武蔵へ進撃する。そこで、『太平記』は次のように記述する。

同じき九日武蔵国へ打ち越えたまふに、紀五左衛門、足利殿の御子息千寿王殿を具足したてまつり、二百余騎にて馳せ着きたり。これより上野・下野・上総・常陸・武蔵の兵ども期せざるに集まり、催さざるに馳せ来たつて、その日

の暮程に、二十万七千余騎を並べひかへたり。

(②―八四頁)

『太平記』の記述によれば、新田莊を出た時は僅か一万弱の兵力が、僅か三歳の千寿王(後の足利義詮)が参加したことにより、兵力が二十倍に増加したように描く。しかし、それは現在の『太平記』が、足利家による改変が行われた可能性が強く感じさせる記述になっているからと考えられる。

史実としては、霜月騒動以来の北条一門による権力の集中とそれに伴う得宗被官による専横に対する関東御家人を中心とした武士達の不満が、高まつていたと考える方が一般的であろう。さらに、北条氏による足利氏を除く源氏一門への圧迫が招いた結果とも言えるであろう。史実として、どれほどの軍勢が集まったかは不明だが、鎌倉幕府の追討軍に対抗することが出来る程の軍勢は、参集できたのであろう。

新田軍と幕府追討軍は、武蔵国小手指原で対陣する。『太平記』は同じ章段の中で以下のように記述する。

同じき十一日の辰の刻に、武蔵国小手指原に打ちのぞみたまふ。ここにてはるかに源氏の陣を見渡せば、その勢雲霞の如くにて、幾千万騎とも言ふべき数を知らず。桜田・長崎これを見て、案に相違やしたりけん、馬をひかへて進みえず。義貞忽ちに入間川を打ち渡つて、まづ関の声を揚げ、

陣をすすめ、早矢合はせの鏑をぞ射させける。平家も鯨波を合はせて、旗を進めて懸かりけり。……(中略)……二百騎・三百騎・千騎・二千騎を添へて、相戦ふ事三十余度に成りしかば、義貞の兵三百余騎討たれ、鎌倉勢五百余騎討死して、日すでに暮れければ、人馬ともに疲れたり、軍は明日と約諾して、義貞三里引き退いて、入間川に陣をとる。鎌倉勢も三里引き退いて、久米川に陣をぞ取つたりける。

(傍線筆者 ②―八六―七頁)

この箇所興味深いことは、「早矢合はせの鏑」という表現であろう。中世の合戦のやり方として、開戦の合図として鏑矢を敵陣に射懸けるという作法があった。それを一般的には「矢合はせ」と呼んでいたが、早く開戦したくて「矢合はせ」もそこに開戦に及んだ様子が想像される。さらに、一日戦い疲れて、「軍は明日」と約束してお互い軍勢を引く様子が描かれている。当時の合戦は、今の我々が考えるよりもずっとルール化されており、それを守っていることがわかる。

次の日、新田軍は鎌倉軍に勝利するのだが、続いて攻め込んだ十五日の分倍河原の戦いで援軍を得た鎌倉軍によって敗北する。そこに、三浦義勝の援軍がやって来て、味方を装って幕府軍の陣地に進入して裏切るという計略によって、勝ちを捨うという話が続く。その結果、新田義貞が大軍を率いて鎌倉を攻撃する話になる。

二

「鎌倉合戦の事」(十一—IV) という章段の冒頭で、『太平記』は次のような記述をする。

さる程に、義貞数箇度の戦ひに討ち勝ちたまひぬと聞えしかば、東八箇国の武士ども、従ひ付く事雲霞の如し。関戸に一日逗留あつて、軍勢の着到を著けられけるに、六十万七十余騎とぞしるせる。(②—九六頁)

新田義貞は、この大軍を三手に分けて鎌倉攻めを開始する。その編成を『太平記』が記すところによれば以下のようになる。

- 一 極楽寺切通し 大館宗氏・江田行義 十万余騎
- 二 巨福呂坂切通し 堀口貞満・大島守之 十万余騎
- 三 化粧坂切通し 新田義貞本隊 五十万余騎

いつの間にか十萬騎が増えていることについては置くことにして、この時代に東国だけで六十萬騎という軍勢が存在するのかを問題にしたい。信頼できる江戸期の資料によれば、日本の総人口は三千万人であった。^(※4)室町時代後期から農業生産が増加し、その人口を養うことが出来たわけだが、鎌倉後期の東国の農業生産力でどれだけ人口を養うことが出来たのであろうか。江

戸期の人口の半分だと考えれば、総人口の4%に当たる軍勢が新田義貞の許に集結したこととなり、とても事実とは思われない数字であることがわかる。

この編成が鎌倉に対して、西方からのみ攻撃をかける形であり、最後の地図を参照していただきたいが、朝比奈切通しや名越切通しなどの東方からの三道には、全く軍勢を配置していない。

多分、軍勢の余力が無かったと考えられる。

幕府方も、軍勢を三手に分けて防戦した。その編成は『太平記』が記すところによれば以下のようになる。

- 一 化粧坂切通し 金沢忠時 三万余騎
- 二 極楽寺切通し 大仏貞直 五万余騎
- 三 洲崎 赤橋守時 六万余騎

赤橋守時が向かった洲崎の地名が分かりにくいのが、両軍の配置から巨福呂坂切通しの西方にある古名であることが新潮日本古典集成の頭注から判明する。その戦いは、激烈を極める。『太平記』の記述を引けば、

さる程に、同日の巳の刻より合戦始まつて、終日・終夜攻め戦ふ。寄手は大勢にて、新手を入れかへ入れかへ攻め入りければ、鎌倉方は防ぎ場・殺所なりければ、うち出でう

ち出で相支へて戦ひける。されば三方に作る鬨の聲、両陣に叫ぶ矢叫びは、天を響かし地を動かす。魚鱗にかかり鶴翼に開いて、前後に当たり左右を支へ、義を重んじ命を輕んじて、安否を一時に定め、剛臆を累代に残すべき合戦なれば、子討たるれどもたすけず、親は乗り越えて前なる敵にかかり、主射落さるれども引き起さず、郎等はその馬に乗つてかけ出で、あるいは引つ組んで勝負をするもあり、あるいは打ちちがへてともに死するもありけり。その猛卒の機を見るに、万人死して一人残り、百陣破れて一陣に成るとも、いつ果つべき軍とは見えざりけり。

②—九八—九頁

少し引用が長くなつたが、この表現が『太平記』の特徴を良く現している。「魚鱗にかかりて鶴翼に開いて」という表現は、『平家物語』に決して出てこない表現であり、「義を重んじ命を輕んじて、安否を一時に定め、剛臆を累代に残すべき合戦なれば」という現実とは全くかけ離れた教義的な表現である。

ここからは、「鎌倉合戦」の記述を少し丁寧を追つてみたい。まずは、「赤橋相模守自害の事」(巻十—V)について、考えてみる。赤橋守時は第十六代執権であり、足利尊氏の義理の兄に当たり、足利尊氏の裏切りと人質としての長男竹若と次男千寿丸の逃亡により、鎌倉幕府内での立場はかなり微妙になつてい

る。赤橋守時は、先陣として洲崎へ向かつたが、その戦いは「この陣の軍強くして、一日一夜のその間に、六十五度まで切り合ひたり。されば数万騎有りつる郎従も、討たれ落ち失する程に、わづかに残るその勢、三百余騎にぞ成りにける。」と記述されるように激しい戦いであつた。その記述の後で、赤橋守時は侍大将の南条高直に向かって次のように述べる。

「……(前略)……されば万死を出でて一生を得、百回負けて一戦に利あるは、合戦の習ひなり。今この戦ひに敵いささか勝つに乗るに似たりといへども、さればとて自家の運今日にきはまりぬとは覚えす。しかりといへども守時においては、一門の安否を見果つるまでもなく、この陣頭にて腹を切らんと思ふなり。その故は、守時、足利殿に女性方の縁に成りぬるあひだ、相模殿を始めたてまつり、一家の人々さこそ心をも置きたまふらめ。これ勇士の恥づるところなり。……(中略)……この陣戦ひ急にして兵皆疲れたり。われ何の面目か有つて、固めたる陣を引いてしかも嫌疑の中にしばらく命を惜しむべき」

②—一〇〇—一頁

(前略)の部分には、漢楚合戦の高祖の故事が語られている。(中略)の部分には、同じく『史記』の「刺客列伝」の田光の故事が語られている。『太平記』では、珍しくもない漢故事の

引用である。この言葉の後に、次のような赤橋守時の最期についての記事がある。

戦ひいまだ半ばならざる最中に、帷幕の中に物具脱ぎ捨てて、腹十文字に切りたまひて北枕にぞ伏したまふ。南条これを見て、「大将すでに御自害ある上は、士卒たれがために命を惜しむべき。いでさらば御供申さん」とて続いて腹を切りければ、同志の侍九十余人、上が上に重なり伏して腹をぞ切つたりける。さてこそ十八日の暮程に、洲崎一番に破れて、義貞の官軍は山内まで入りにけり。

(同頁)

同様な記述は、『梅松論』^(※)にも次のようにある。

武蔵路は相模守守時、洲崎千代塚におひて合戦をいたしけるが、是も討負て一足も退ず自害す。南條左衛門尉并安久井入道一處にて命を落す。

(六二頁)

『梅松論』という作品は、足利氏寄りの記事が目立つ史書ではあるが、この記述に関しては、特に問題を感じない。洲崎で赤橋守時が自害したことは史実であろう。(地図①)

この後、『太平記』は、極楽寺切通しで奮戦する本間山城入

道の姿を描く。極楽寺切通しの防衛責任者の大仏貞直から勘気を蒙っていた本間は、長年の恩顧に報いるために、敵の大將である大館宗氏の軍勢の中に駆け入って、大將である大館宗氏の首を取り、それを土産に大仏貞直に見参する。見参叶ってその場で腹を切る。その結果、新田軍は片瀬・腰越まで退却する。

三

大館宗氏が討ち取られ、その軍勢が片瀬・腰越まで退却したことを知った新田義貞は、二万余騎の軍勢とともに極楽寺切通しへ向かう。そこで極楽寺切通しの防衛態勢を見て、とても攻略することは困難であると考ええる。そこで「稲村ヶ崎の奇跡」が起きる。

義貞馬より下りたまひて、胄を脱いで海上を遙々と伏し拝み、龍神に向つて祈誓したまひける。……(祈誓の言葉略)……と至信に祈念し、みづから佩きたまへる金作りの太刀を抜いて、海中へ投げたまひけり。まことに龍神納受やしたまひけん、その夜の月の入り方に、先々さらに干る事も無かりける稲村崎にはかに二十余町干あがつて、平沙渺々たり。横矢射んと構へぬる数千の兵船も、落ち行く塩に誘はれて、遙かの沖に漂へり。不思議と言ふもたぐひ無し。

(②) 一〇四〜五頁

『太平記』「稲村崎干潟と成る事」(巻一〇—Ⅵ)では、続いて次のように記述する。

越後・上野・武蔵・相模の軍勢ども六万余騎を一手に成して、稲村崎の遠干潟を真一文字に懸け通って、鎌倉中に乱れ入る。数多の兵これを見て、後なる敵に懸からんとすれば、前なる寄手後に付いて攻め入らんとす。前なる敵を防かんとすれば、後の大勢道を塞いで討たんとす。進退度を失ひ、東西に心迷うて、はかばかしく敵に向つて軍をいたす事は無かりけり。(同頁)

通れないはずの稲村ヶ崎を突破され、極楽寺切通しの背後から新田軍が迫る状況が描かれている。(地図②) 典型的な後背地に対する敵の出現である。「このほか末々の平氏八十余人、国の兵十万余騎をば、弱からん方へ向ふべしとて、鎌倉中に残されたり。」(九八頁)と書かれていた予備軍の出勤になるわけだが、ここで『太平記』は面白い挿話を描く。

長崎円喜の烏帽子子で一人当千と頼りにされていた島津四郎という武士が、北条高時自ら酌をした酒を飲んだ後、関東無双の名馬「白波」を与えられて、浜の手を突破した新田軍へ向かつて行ったが、

あれを見よとのめきて、敵・御方もろともにかたづを吞

うで汗を流し、これを見物してぞひかへたる。かかるところに、島津馬より飛んで下り、胃を脱いでしづしづと見繕ひをする程に、何とすると見居たれば、おめおめと降参して、義貞の勢にぞ加はりける。貴賤・上下これを見て、誉めつる言を翻して、にくまぬ者も無かりけり。これを降人の始めとして、あるいは年来重恩の郎従、あるいは累代奉公の家人ども、主を捨てて降人になり、親を捨てて敵に付き、目も当てられざる有様なり。(②—一〇七頁)

幕府の中樞にいる長崎円喜の烏帽子子である島津四郎が、一軍さもせずに、おめおめと降参したことがこの合戦の転機となつたと『太平記』の記述から読み取れる。(地図③) ここからほかの幕府側の人々の心に伝染していく。この時代の合戦によく見られるように均衡がどちらかに少し傾くと、それが大きな流れのようになり、結果として大きな差となるという現象である。誰しも、自分の命が惜しいし、名字の地は安堵されたいという現実的な欲望の前に、精神的な義や忠と言つたものは負けてしまふのであろう。「およそ源平威を振るひ、互いに天下を争はん事も、今日を限りとぞ見えたりける。」(同頁)と『太平記』が続けて記述するのも、正鵠を射ているのであろう。稲村ヶ崎から由比ヶ浜への新田軍の突破によつて、切通しに囲まれた要塞都市鎌倉は、その要塞の弱点である後背地をさらけ出すこと

になった結果、戦闘は掃討戦の段階に入ったと言えよう。

由比ヶ浜が突破されて、最初に包囲攻撃をうけるのは、極楽寺切通しの大仏貞直である。昨日まで二万余騎の軍勢が今日には三百余騎になって、前後を包囲され進退が窮まった上に、鎌倉殿の屋敷からも火の手が上がり、「世間今はさてと思ひけん」と覚悟した時に、主人の自害を勧めるために郎従三十余人が切腹した。

貞直これを見たまひて、「日本一の不覚の者どもの行跡かな。千騎が一騎に成るまでも、敵を亡ぼして名を後代に残すこそ、勇士の本意とするところなれ。いでさらば最後の一合戦快うして、兵の義をすすめん」とて、二百余騎の兵を相従へ、……（中略）……貞直その兵を指し招いて、「今は末々の敵と懸け合ひても無益なり」とて、脇屋義助雲霞のごとくにひかへたる真中へ懸け入り、一人も残らず討死して、尸を戦場の土にぞ残しける。

②―一一三―四頁

赤橋守時の例で分かる通り、大將が最後まで戦うという事は珍しい事であった。ある程度闘って戦さの行く末が見えた段階で、郎等に防ぎ矢を射らせて時間を稼ぎ、その間に心静かに十念を唱えつつ腹を切るというのが一般的であり、『太平記』にもよく見られる例である。しかし、大仏貞直は地獄へ落ちるしか無

い「修羅の道」を選択する。（地図⑤）

金沢貞将は、山内の合戦で傷だらけになって高時のいる東勝寺に戻る。そこで、六波羅探題に任命する御教書を賜り、相模守に任じられたが、

貞将は、一家の滅亡日の中を過ぐさじと思はれけれども、「多年の所望、氏族の規模とする職なれば、今は冥途の思ひ出にもなれかし」と、かの御教書をうけ取つて、また戦場へ打ち出でたまひけるが、……（後略）……

②―一一四頁

そのまま、新田軍に突撃して討ち死にした。（地図⑥）

続いて、「信忍自害の事」（卷十一―IX）の章段では北条信忍の最期を描く。信忍は、江州番場道場で非業の死を遂げた越後守仲時の父親であった。（卷九―VIII）化粧坂の切通しで激しい戦闘の後、生き残った二十余騎の若党とともに自害した。その時、息子の最期を思い、「待てしばし死出の山辺の旅の道 同じく越えて憂き世語らん」の歌を血で御堂の柱に記した。

年来たしなみもてあそびたまひし事とて、最後の時も忘れず、心中の愁緒を述べて、天下の称歎に残されける、数寄の程こそやさしけれと、皆感涙をぞ流しける。

②―一一五―六頁

辞世の和歌を詠んだことを賞賛する言葉で終わっている。(地
図⑦)

この後、北条(塩田) 国時とその子息俊時の最期の様子を描写、従者狩野重光がその財産を根こそぎ奪うという背信を描き、重光の最後を記述する挿話がある。続いて、塩飽聖遠が最期の折に辞世の頌を書き終えると同時に息子忠頼によって首を打たれ、忠頼も自害する様子が描かれている。

このように、北条一門を始めとして恩顧の武士たちの自害の描写が続く中で、「安東入道自害の事」(巻十一―十二)の章段がある。安東入道聖秀は新田義貞の北の方の伯父にあたり、前述した赤橋守時と似たような立場にあった。

安東、始めは三千余騎にて稲瀬川へ向ひたりけるが、世良田太郎が稲村崎より後へ回りける勢に陣を破られて引きけるが、由良・長浜が勢に取り籠められて百余騎に討ち成さるれ、わが身も薄手あまた所負うて、己が館へ帰つたりけるが、……(中略)……鎌倉殿の御屋形も焼けて、入道殿東勝寺へ落ちさせたまひぬと申す者ありければ、「さて御屋形の焼け跡には、傍輩何様腹切り討死してみゆるか」と尋ねければ、「一人も見えず候ふ」とぞ答へける。

(②)―一二二頁)

戻った自分の屋敷は、すでに焼け跡になっており妻子の行方も分からぬ。それなのに、安東聖秀の気持ちは高時の屋形の焼け跡に向かう。

これを聞きて、安東、「口惜しき事かな。日本国の主、鎌倉殿程の年来住みたまひし所を、敵の馬の蹄に懸けさせながら、そこに千人も二千人も討死する人の無かりし事よと、後の人々に欺かれん事こそ恥辱なれ。いざや人々、とても死せんずる命を、御屋形の焼け跡にて心しづかに自害して、鎌倉殿の御恥をすすがん」とて、討ち残された郎等百余騎を相従へて、小町口へ打ちのぞむ。

(一二二―一二三頁)

高時の屋形の焼け跡に到着した安東聖秀の許に、義貞の北の方からの降参を勧める手紙が到着する。

これを見て、安東大きに色を損じて申しけるは、「梅檀の林に入るものは、染めざるに衣おのづから香しといへり。武士の女房たるものは、けなげなる心一つ持ちてこそ、その家をも継ぎ、子孫の名をもあらはず事なれ。……(漢楚合戦の王陵の故事略)……われただ今まで武恩に浴して、人に知らるる身となれり。今事の急なるにのぞんで降人に出でたらば、人あに恥を知つたるものと思はんや。さ

れば女性心にてたとひかやうの事を言はるとも、義貞勇士の義を知りたまはば、さる事やあるべき、制せらるべし。また義貞たとひ敵の志を計らんとしたまふとも、北の方はわが方様の名を失はじと思はれば、固く辞せらるべし。ただ似るを友とするうたてき、子孫のためにたのまれず」と、一度は恨み、一度は怒つて、かの使ひの見る前にて、その文を刀にぎり加へて、腹掻き切つてぞ失せたまひける。

(一一二―四頁)

この安東聖秀の自害の記事の後に、北条高時の遺児亀寿丸の鎌倉脱出譚を描く。この後の中先代の乱を伏線となる記事である。

四

卷十の鎌倉方の勇将として描かれている長崎高重は、最期の戦いを十分に戦つた後、北条高時以下北条一門が集結している東勝寺に帰着した。高重は「はやはや御自害候へ。高重先をつかまつて手本に見せまゐらせ候はん」と言つて自害する。その後、重臣に続いて北条高時も自害する。北条一族四十六人を始めとして八百七十余人が一所で死んだと記す(地図⑨)

この外門葉・恩顧の者、僧俗・男女を言はず、聞き伝へ聞き伝へ泉下に恩を報ずる人、世上に悲しみをよほす者、

遠国の事はいざ知らず、鎌倉中を考ふるに、すべて六千余人なり。ああこの日いかなる日ぞや。元弘三年五月二十一日と申すに、平家九代の繁昌一時に滅亡して、源氏多年の蟄懐、一朝に開くる事を得たり。

(一四二頁)

『太平記』卷十は、この記述によつて巻を閉じることになる。鎌倉幕府の滅亡を描く卷十は、京都における幕府権力の象徴であつた六波羅探題の滅亡を描く卷九を承け、凄惨な大規模な自害の場面で終わる。軍記物語の性格として、自害した人々の名前を過去帳的に記録する点も卷九と共通であるが、そこには鎮魂的な意味と後代へ名を残すという意味合いがあつた。

最後に、『太平記』の描き方に注目したい。最後の地図を参照していただきたい。「鎌倉合戦」関係記事の記述に基づいて作成したものが、洲崎の戦いの赤橋守時の自害(①)から始まり、東勝寺における北条高時以下北条一門の自害(⑨)までを、記述に従つて戦闘経過を場所に着目して作成したものである。

鎌倉北西の前衛陣地である洲崎で赤橋守時が戦死し、戦いの焦点は三方所の切通しに移っていく。南西の極楽寺切通しの苦戦(②)から現場へ行った総大将新田義貞が、稲村ヶ崎の奇跡(③)を起こす。まず、浜の手との包圍攻撃で極楽寺切通しを攻略(④)し、その後北上して大仏切通しを攻略(⑤)。鎌倉

市内に溢れる新田軍との最後の防衛線である若宮大路を巡る絶望的な防衛戦が北端まで追いつめられる(⑥)。最後に残った化粧坂の切通しが突破される(⑦)。この後は、降伏か死かの選択しか残っていない。そして、自害を選んだ人たちが描かれていく(⑧、⑨)。

同時に進行する事件を文学はどのように表現するのか。この問題を考える時、『平家物語』の「一ノ谷合戦譚」と『太平記』の「鎌倉合戦」関係章段は、その材料を与えているように思われる。とかく、構造に問題が指摘される『太平記』ではあるが、「鎌倉合戦」に関する限り、緊密な構造を読み取ることができる。

補注

- (※1) 以下、巻数と章段を十一―IIのように記す。
- (※2) 『難太平記』の記述を参照。
- (※3) 石井進氏による。
- (※4) マクニール著『疫病の世界史』(中公文庫)などによる。
- (※5) 新撰日本古典文庫(一九七五年刊)による。

下段の地図は新編日本古典文学全集『太平記』①(小学館)に附載された地図を基に作成したものである。

